

# 平家物語の構想

——修羅のゆくえと灌頂巻——

以倉紘平

この拙論の形は、三章から成る私の「平家物語論」注1の一番最後に属していて、前章の「平貞能像—その西国落ちについて—」の内容を受け継いでいたために、ここだけを独立して取りあげると、前章を前提にした表現があるために、理解の困難な点が生じるのではないかと思つた。そこで私は「序」については、そのまゝにして、一の、特に前章を受け継いだ都決戦論の説明部分については、このさい、加筆して説明し直すこととした。けれどもなお、説明不足の箇所があつたり、こんどは逆に、加筆による重複の生じたりしている箇所については、微力のせいゆえ、どうか御寛恕を願いたいと思う。

## 序

私は、前稿「平貞能像」において、都決戦論なるものの本質が、「六道」なканずく「修羅」の拒否であつたことを指摘した。「落人」とあそこ、ここに「うちちられ」ること、つまりは「修羅」のさなかで横死すること、の拒否である、と述べたのであつた。さて、私はここで、知盛、貞能の両名によって、はっきりと洞察されていた、その「修羅」なるもの、様相について、もう一度検討を加え、彼等の見た、「修羅」なるものが、この物語の作者によって、どのように受けとめられ、どのように克服されて行つたかを、主と

して平知盛像の分析を中心に、平家物語の代表的な伝本、四部合戦状本（以下④本と略す）と、屋代本（以下⑤本と略す）のなかに、あとづけてみたいと思う。一般的に、灌頂巻が、平曲上の伝法灌頂に基くものであることは、すでに通説となつてゐるが、④本のそれは、結縁灌頂であると考えられるもの、ほゞ通説に近い<sup>注2</sup>。私もその考えに賛成であるが、その根拠を、灌頂巻を有せぬ⑤本との比較の上に、それぞれの伝本の構想の必然性を明らかにすることによつて考えてみたい。私にとって、都決戦論のなかで主張された、「修羅」なるもののゆくえという問題こそ、灌頂巻の有無にかゝわる、この物語の構想を規定していると思われるのである。

平家物語、巻七、「一門都落」あたりの章段は、この物語の構想を考へる上で、大事なところであり、わけても一門都落ちの段階で、平知盛と、貞能の両名によつて述べられた都決戦論は、この問題の急所を成していると考えられる。私は以下、まず、都決戦論とは一



体、何であり、またその思想の核心や本質は、どこにあるのか、について、ここにもう一度詳しく書いてみたいと思う。都決戦論というのは、平家一門が、都を西へ落ちのびようとしたさいに、都落ちをしないで、都に踏み止どまり、都で全員決戦打死すべきことを主張した、その内容をさすのであるが、知盛のその主張は、平頼盛（清盛の弟）の裏切りが発覚し、小松家の子息たちの去就にも疑いのもとれる状況のなかで、次のようになされるのである。（以下、（屋）本、（四）本とも、覚一本とさしたる違いがないので、覚一本によって引用する。）「都を出でていまだ一日だにも過ぎざるに、いっしか人の心どものかはりゆくうたてきよ。まして行すゑとてもさこそはあらんずらめとおもひしかば、都のうちでいかにもならむと申つる物を」（大系本巻七 一〇九頁）」

ここで知盛は、都を落ちて、まだ一日も経過していないのに、すでに一門の内部からあらわれた裏切りの事実に対して、それはすでに予測していたことであり、まして西国へ落ちれば、なおさら、そのような事件が続出するであろうから、自分は都で、「いかにもならん」と主張したのだと述べている。そして、さらに（四）本や（屋）本の作者は、すぐそれに続けて、「誠ニ理ト覚テ哀ナリ」と同感の意を表しており、覚一本においても、同様の述懐を述べた屋島の知盛の言葉のすぐ後に、同じ批評が記されてあるのである。注3 また、源平盛衰記においても、巻四十三、壇浦のところ、このようなあさましい滅亡の第一歩は、すでに宗盛の都落ちの決定そのものにはなまされていたといふたげに、「一説云」として、知盛入水のくだりで、「……哀此人（＝知盛）に世を譲たらば、たとひ運の極也とも、都にて如何にも成給なましと、惜まぬ者はなかりけり。」と評されて

あるのである。一体、このそれぞれの伝本の作者によっても同感さされていた「都のうちでいかにもならん」という考えの根底には、どういう思想がひそんでいると、考えるべきであろうか。まず第一に、文意を卒直に理解するとすれば、この知盛の、都で「いかにもならん」という主張の根拠が、「人の心どものかわりゆく」ことへの洞察と深くむすびついていることは自明であろうと思う。したがって、そこをきわめてドライに読めば、知盛は、不利な戦いが長びけば長びくほど裏切りの数が増加し、それだけ兵力が低下する点から、早期に都で決戦した方が有利であるという、戦略上の見通しを述べたにすぎない、ということになるであろうが、それはあまりに没主観的な解釈といふべきであって、知盛の内面にそくして考えてみようとするならば、ここはやはり、西国に落ちたとしても、裏切りや変節によって、先き細りになっていくにちがいない平家一門の人々のあさましい滅亡の仕方を拒否せんとしているのであらうと思う。つまり、それは、もったいば、この物語の終末に位置する建礼門院の告白と符号して、西国に落ちることにより平家一門の人々が体験した、かの「六道」の世界、なんづく、「修羅」の世界に対する、拒否の思想をはらんでいるということになる。この点は、貞能の都決戦論とも共通しているのである。以下は、源氏追討にむかった貞能が、平氏の都落ちの一行と、「うどのの辺」で、行きあう場面である。

「是は抑いづちへとおちさせ給候やらん。西国へくだらせ給ひたらば、おち人としてあそこ、にてうちあらされ、うき名をながさせ給はん事こそ口惜候へ。たゞ都のうちでこそいかにもならせ給はめ」（大系本巻七 一一二頁）



ここにおいても貞能は、「たゞ都のうちでこそいかにもならせ給はめ」という根拠を、西国へくだらせ給ひたらば、おち人としてあそここにてうちちらされ」る点に求めていることは自明であるが、こゝも決して、単純に、都落ちが敗北にしかつながらぬという戦局上の判断を述べた所とのみ理解することはできないと思う。この「西国へくだらせ給ひたらば、おち人としてあそここにてうちちらされ」という表現は、都落ちのゆく手には、西国の裏切りが待ちうけており、その裏切りによって平氏は、「おち人として、あそここにてうちちらされ」る悲惨と屈辱を味わうであろうという意味であつて、まさに知盛の「……いつしか人の心どものかわりゆくうたてさよ。まして西国とてもさこそあらんずらめと思ひしかば」と、同一の内容をもち、それをもっと、具体的に、表現したものなのである。平貞能は、西国の人心の動向について実は、体験的によく知悉していたのであつた。この点を少し詳しく書いてみる。肥後守平貞能は、任国の関係もあつてか、治承五年の夏に西国（九州）鎮定に赴き、二年間の戦闘の後、都落ちの数日前に凱旋上洛を果した武人であつた。物語では、戦えば敗けて帰る平氏の將軍たちのなかにあつて、ともかくも貞能だけは、たゞ一人の凱旋將軍として登場してくるのであるけれども、同時に一方ではその戦果について、(屋)本では「僅カニ西国斗は随ヘトモ」と記されたり、(四)本においては、「九百余騎」の少数による奇異な入洛を果したという風に記されているのである。この「僅カニ西国斗ハ随ヘトモ」の、「僅カニ」は、覚一本では、「纔に」であつて、大系本の頭注に示すごとく、「かろうじて」「やっと」というような意味であつて、貞能はその平氏の根拠地であつた西国から、かろうじて、やっと、凱旋を果し

たのであつた。まさに、これは、「吉記」の記録に、「肥後守貞能、今日入洛、軍兵纔千余騎云々、日来及数万之由風聞、洛中之人頗失色」(寿永二年六月十八日)とあるような、敗北と紙一重の泥まみれの凱旋であつたのである。もともと西国に詳しい貞能は、その戦闘において、一段と、西国の人心の動向を把握し、そこからさらに、この戦争の本質や見通しについても、たしかな判断を得て帰つたものと思われるのである。(しかしこの点は、別稿「平貞能像」に詳述したので、今はふれない。)とにかく、肥後守貞能は、九州において、「昔は昔、今は今」という緒方四郎の言葉に代表される、きわめて合理的、現実的な在地領主層の不穏な動向を、キャッチして歸つたことは、まちがいあるまいと思う。いふなれば貞能の凱旋は、旧体制を維持し、貴族化した平氏一門への、離反と不服従を前提とする、単なる状況待ちのための、一時的な和睦以外の何物でもなかつただろうと思われるのである。従つて、こうした武人の口から、「西国へくだらせ給ひたらば、おち人としてあそここにてうちちらされ、うき名を流させ給はん事こそ口惜候へ」という見通しが述べられたのは、いわば当然であつた。つまり、このようにして、知盛と並んで貞能もまた、都決戦の立論の根拠として、西国における裏切りを予想し、「おち人としてあそここにてうちちらされ」る屈辱と惨劇(修羅)を未然に回避しようとしていたことが、明らかになると思ふのである。しかし、平家一門の人々が、この兩名の主張に反して、都落ちを決行した結果、かの建礼門院の告白にみられる「六道」の体験、なかんずく「修羅」の体験を味わねばならなかつたことはすでに書いた。まさに、都決戦論の思想とは、こうした裏切り、背信を中心とする滅亡のあさましき、を拒否する精神である



といつてよい。この精神は、早くは平重盛の造型に見い出され、重盛早世の因をなし、都決戦論から、一の谷、屋島、壇浦へと続くこの物語の構想の背骨にあたる部分で、幾度となく反芻され最後に灌頂巻によって結実されることとなる。私は、以下、この裏切りを中心とする滅亡の体験を、すでに繰り返したように、今、仮りに、「修羅」の体験、あるいは世界、と呼んで、平氏の滅亡にいたる戦争体験——心の内部・外部をも含めた——を総称することにより、この物語の作者が、いかにその暗い人負V的世界を克服し、叙事詩としての澄明な人正V的世界を獲得することができたか、について、それぞれ、この物語の代表的な伝本、(四)本と(屋)本のなかに、まさぐってゆきたいと思う。

## 二

ひとまず私は、すでに都落ちの時点で、知盛・貞能兩名によって予測されていた西国における裏切りの発生の問題について、その骨組の部分から紹介しよう。その第一は壇浦における平知盛と、阿波民部重能(成良)の描写である。この重能こそは、西国における平家軍が、自軍の「副將軍」(延慶本・長門本に拠る)とも頼んだ、西国(四国)の大豪族であったが、壇浦の海上で、ついに平家を裏切った武人である。平知盛は、この重能の変節をいちはやく見抜き、総帥宗盛に斬首を進言するが、凡庸な彼は、それを許さない。しかし、現実には、知盛の予言通り、重能の率いる四国の全船団が、平家軍にむかって、弓を引くという結果となつて具現するのである。「やすからぬ。重能めをきつてすつべかりつるものを」と知盛は、「ちたび後悔」するけれども、もはや、およばない。思えば、

この裏切りが平家滅亡のフィナーレであった。「さる程に、四国、鎮西の兵ども、みな平家をそむいて源氏につく。いままでしたがひついたりし物どもも、君にむかつて弓をひき、主に対して太刀をぬく。……源平の国あらそひ、けふをかぎりぞ見えたりける」(屋七九三頁(大系本下巻)三三五頁)ところで、この平家軍の潰滅の因とみられた重能の裏切りは、実はすでに、一の谷の所で、伏線として、次のように紹介されていたのであった。有名なくだりなので、簡単に記すと、一の谷の戦いにやぶれ、知盛は、子息知章と、家来の監物太郎と一緒に、味方の船団の待つ海にむかつて落ちのびる。けれども、後方の敵に追いつかれ、二人を見殺しにして、名馬井上黒を疾駆し、海を泳がせ、おのれだけは、自軍の船に救助される。ところが、愛馬の収容場所がない。彼は、おのれの命を救ってくれた井上黒を、やむなく渚に追い返そうとする。この時である、阿波民部重能は、弓に矢をつがえ、「御馬敵のものになり候なんす。るころし候はん」と声をかけ、射殺せんとするのである。これに対し、知盛は、「何の物にもならばなれ、わが命をたすけたらん物を、あるべうもなし」と制止するのであるが、こゝに描かれている知盛と重能の対比は、あきらかに壇浦における両者の対立の伏線である。恩ある者を、敵の兵力になるからといって、射殺せんとするのは、もつとも打算的、功利的な考え方である。このような非情な計算のできる人間であつたればこそ、重能は、壇浦の海戦で、不利になつた平家軍を、みごとに裏切ることができたのであった。まさに、都落ちの時点で、知盛が、「人の心どものかわりゆくうたてさ」といふ、「西国とても、さこそはあらんずらめ」と予測した事態が、現実化したのであった。この一の谷の合戦を代表する「知章最期」の章段



を伏線とし、重能の変節によっておこる平氏の滅亡を描くことを主要なモチーフとする「鶏合壇浦合戦」を読んでみると、「一門都落」の章段における都決戦論は、すべてこれらの予測の上に立つた、物語の構想上きわめて重要な意味を持っていることに気付くと思う。なるほど、残念なことに、(屋)本では、巻九が欠巻であるために、「知章最期」の章段の内容は、その巻の発見されぬ限り、実際には、たしかめようがない。しかし、この章段の内容を有せぬ現存諸本は皆無であり(屋)本のふくまれる八坂本系統の諸本においても、覚一本、(四)本と比較して、右の結論はいえるのである。ちなみに、この三章段は、渥美かをる氏の「平家物語の基礎的研究」に拠れば、原平家に記事有と推定された部分であるが、もし、原平家が、今日言われているように、ごく簡単な詞章からなる三巻本である、とするなら、この三章段の物語における意味と比重は、もっと明瞭で、かつ重かったとみななければならぬ。つまり、この三章段を中心とする構想の意味は、裏切りを中心に平家の滅亡を語ろう、とする点にあるのである。阿波民部重能に代表される、功利的な西国の領主層の裏切りが、平家をほろぼした因であるとする考えは、かつて今成元昭氏も指摘された通り、日蓮遺文集にもみえるのである。「義経はいかに平家をばせめおとしがたかりしかども、成良(重能)をかたらひて平家をほろぼし、大将殿はおさだを親のかたきとをばせしかども平家を落さざりしには頸を切り給はず……」。

(昭和新聞日蓮聖人遺文全集「崇徳天皇御書」一一七二頁) こう見てくると、巻七都落ち以降の平家物語の構想は、西国における武士団の裏切りを予測した知盛、貞能の両名が、重盛の精神を継承して、「修羅」の巷で横死することを拒否し、都決戦論を献策したにもかかわらず、結局、平氏一門は、都を

落ちることによって、裏切りを中心とする「修羅」のさなかで滅亡していく、というふうな構成されていることがわかれると思う。ところで、このような西国における「修羅」の体験を、この物語の作者は、それぞれの伝本 (四)本と(屋)本において、どのように受けとめ、かつどのようなように克服していったであろうか。

### 三

この問題については、かつて私は、「二ツの知盛像」(『日本文学』一九六八年六月)においてふれたことがあるが、この点に関するキーポイントは、一の谷敗北後の屋島における知盛像(物語では「遠矢」の章段にあたる)にあると思う。この屋島の知盛の述懐は、例の三章段(都落ち、一の谷、壇浦を描く章段)の内容と並んできわめて重要なところである。まず(四)本から引用する。「内大臣被仰、出都既三箇年、浦伝島伝明暮、不事数、入道譲、世彼下福原手合、奉取逃、高倉宮之程無心憂事有、新中納言云、自出都少可踐尻足不思、一谷戦思此御有様見了進、与武蔵守一所不死事口惜……」(下巻一、四八頁) 続いて知盛は、都落ちの時点で予測した西国の人心の頼みがたき様について、次のように述べて都を落ちたことを後悔している。「凡東国北国奴原随分蒙、重恩、忽忘恩変契、皆被語頼朝、西国有、佐思、只都討死射死館懸火成、塵灰思、身不事、人並々浮出見斯憂目……」(下巻一、四八頁) 彼は、潰滅に近い打撃をうけた一の谷の敗戦後の屋島において、寝返りが噂される九州の武士団を前にして、「身不事」ば、都落ちに同行した結果、「斯憂目」に逢着したことを後悔し、



くやしがつているのであるが、特に次のくだりは、語り本系諸本はもちろん、同じ読み本系の延慶本、長門本、源平盛衰記においてすらみられない④本独自のユニークな箇所であるだけに注目に価する。「一谷戦と比御有様見了参武蔵守一所死ザリシ事コソ口惜」この屋島の敗北的な状況においてさえ、なお宗盛が高倉宮謀反以前に、宮を福原へ連行しなかった点に平家の敗因を求めるといった「拙気」なぐちに対し、知盛は、宗盛の率いる平家の「有様」を最後まで「見了」ように思って、子息知章（武蔵守）と「一所」で、一の谷の戦いにおいて討死しなかったことを後悔しているのである。これまで一度も「尻足」をふむというような卑怯なふるまいをしたことのない彼にとって、平家の大將軍であつたがために、惨殺される息子を目撃しながら逃げねばならなかったことほど「口惜」しい体験はなかったであろう。まさにその鬼の心こそ、修羅の心と呼ぶべきである。彼はもはや、いくどとなくそういう修羅の体験をくぐりぬけてきたのであり、だからこそあの時一の谷の戦いで打死すべきであつた、都で決戦すべきであつたのである。彼の悔恨と、その意志に反して歩んだおのれの生に対する怨恨とは、ここにきわまったといえるだろう。このような知盛にとって、壇浦の合戦における入水は、まさに都落ちの時点で、「討死射死館懸火成塵灰」という願望の遅い実現であつたのである。「忘恩変契」じた西国の人心によって裏切られ、その屈辱と悲惨のなかで滅びるよりは、都で死ぬことを望みながら、平家軍の責任者であるために、一門の最後を、「見了」ねばならなかったこの男にとって、その「口惜」さは、いかほどであつただろう。流布本系統を底本とする石母田正氏の知盛像とはちがつて、④本におけるそれは、なるほ

ど壇浦において、やつとのこと死への願望の実現の時を得たもののみが持つ、一種のやすらぎのようなものを感じとりはするが、決してそこに「運命を見とどけたものの爽快さ」のようなものを感じとることはできない。かつて拙論において述べたように、④本における知盛像には、運命の洞察者としての姿はないといつてよいのである。（屋本では、都落ちの時点における「東国大名許し」に当る章段において、知盛が運命観を披瀝している。「畠山庄司重義、弟小山田別当有重、宇津宮左衛門朝綱、是三人ハ去治承三年ヨリ被召籠テ有シヲ、大臣殿計ニ此等カ首ヲ可被刎ト宜ヒケルヲ、平大納言、新中納言被申ケルハ、「此等百人千人切ラセ給テ候共、御運尽サセ給ナン後ハ世ヲ取セ給ハン事難カルヘシ。東国ニ候彼等カ妻子共カ、サコソ歎候ラメ、今ヤ下ルノト待候覽ニ切レ進セタリト聞ヘ候ハ何斗ノ思ニテカ候ハンスラン、只東国ヘ可被返遣トコソ覚ヘ候ヘ……。」（屋本巻七 五五六、五五七頁）一方、④本においては、知盛の代りに貞能が登場して、しかも、運命観などは語っていないのである。「日来被召置平家方、東国者共宇都宮左衛門尉朝綱、畠山庄司重能、小山田別当有重、折節在京大番勤候、子息郎從等皆付兵衛佐、被召籠下西国、可被切之由有沙汰、貞能諫申、被召彼等首不由、田地所領妻子眷属佐悲候、疾々有御免可被下本国……」（下巻 三三〇頁）なるほど、④本の知盛も壇浦合戦の開始にあたって、「運命尽ヌレバ不及力而名惜」と述べてはい。しかし、都落ちの時点における運命観の描出をみない④本の文脈にあっては、この壇浦における運命観は、（屋本のように最重要視するわけにはいかない。④本における知盛像は、やはり都決戦論をその骨子とし、人間の裏切りを因とする没落のドラマ——「修



「羅」を拒否して、都で死ぬことを願いながら、心ならずも「修羅」のさなかで死なねばならなかった悲劇——が中心であるといっている。彼の像は、かつて書いたように、<sup>注9</sup>現実に深くかわって、現実を越える視点を持たない武人の像である。彼の深い存在の輪郭からは、おのれの意志に反して生きた男の、怨嗟の炎のようなものが浮かび上っていることを感じざるをえない。<sup>注10</sup>④本の知盛像のおのれの生に対する絶望は、それほどに暗く深かったというべきである。このような知盛からは、もはや語り本系諸本におけるそれのような「彼はここで何を見たというのであろうか。いうまでもなく、それは内乱の歴史の変動と、そこにくりひろげられた人間の一切の浮沈、喜劇と悲劇であり、それを通して厳として存在する運命の支配であらう。」<sup>注10</sup>というような歴史の必然性を肯定しえたもののみの持つ、澄明、清朗なイメージを思い描くことは困難である。私は、④本における知盛像の彫琢に漂う暗い絶望のイメージこそ、その時代とおのれの未来を、悔恨や怨恨によってしか生きることのできなかった階層の人々の、おのれの情念の対象化の結果であったと主張する。それは、「今生の望み一事ものこる所なし」といって放った清盛像を支えていた階層の人々の意識とは、まったく対立するものであった。こうした人々の恨みがましい人生に対する慰藉は、この物語では、西海に没した平家一門に対する建礼門院の回向——鎮魂——として、構想されたのであった。この灌頂巻の女院の夢の中に、畜生道に堕ちた一門の人々が登場するが、④本においてのみ、その一門の代表は、平知盛になっており、彼は「訪<sup>ミタガハ</sup>後生」と女院に告げているが、④本灌頂巻は、明らかに平知盛に代表される平家一門の人々の怨念に対する、鎮魂の構図を持つものであった。そこに灌

頂巻一篇の持つ深い思想的根柢があると私は思う。

#### 四

ところで、一方、灌頂巻を有せぬ(屋)本において、西国における「修羅」は、平知盛の目に、どのように映じていたであらうか。平知盛像に関する(屋)本と(四)本の目立った違いは、次の三点に集約できる。そのひとつは、(屋)本では、都落ちの「東国大名許し」に当たる章段で、平知盛が、運命の洞察者として登場している点である。この「東国大名許し」の助命者が、④本では史実通り、貞能になっ

ていて、しかも運命観の披瀝のなかったことはすでに書いた。それ故、この(屋)本の描出は、明らかにフィクションであり、(屋)本の作者は、この知盛に、意図的に運命観を披瀝せしめたのであった。この都落ちの時点における知盛の運命観は、壇浦の海戦における運命の洞察と対をなし、そこに石母田正氏の有名な知盛像の発見があったことは、すでに一般化している。(四)本と(屋)本における第二の相違点は、④本にあった知盛の屋島の記事の全文が無いことである。即ち、西国の領主層の寝返りの噂を前にして、「身不<sup>ミナ</sup>一事<sup>ニ</sup>」<sup>注11</sup>ば、都落ちに同行し、たび重なる敗戦の「憂目」にあったおのれを後悔し、「一谷戦<sup>ヒ</sup>に此御有様<sup>ミヤコ</sup>見<sup>ミ</sup>了<sup>シ</sup>参<sup>マシ</sup>武蔵守一所死<sup>シ</sup>ザリシ事<sup>コト</sup>こそ口惜<sup>コト</sup>」と無念がるあの④本の知盛像の急所にあたる全文が無いのである。つまり、このことは、(屋)本の知盛像にあつては、「修羅」を拒否して、都で死すべきであった、一谷の戦いで、討死すべきであったという「口惜」さにみちみちた知盛像にとってかわって、一門の没落をもちや運命と諦観し、運命がつかれば、裏切りの勃発



するの、もまた必然である、と観ずる一種の道人風な知盛像の形象がみられるのである。第三に、このような知盛にあっては、もはや④本のそれのように、この合戦を、決して敵將義経の首をあげる、というようなことにその目標をおいて戦おうとはしなくなる。例えば、壇浦の海上で、④本の知盛は「日本我朝天竺震旦、雖無双明將、勇將一運命、不及力而名惜、東国者共陋随ケ不見、何料命可惜、為何取九郎冠者入海今其有思事……」(下巻(一七三頁))と述べるのだが、(屋)本においては、「軍ハ今日ソ限り各少シモ退ク心有ヘカラス、天竺震旦ニモ日本吾朝ニモ無<sup>レ</sup>比雖<sup>ニ</sup>名將勇士<sup>一</sup>運命尽ヌレハ不及<sup>レ</sup>力、サリナカラ東国ノ奴原ニ弱氣ミユナ、何ツノ料ニ命ヲハ可惜ソ、是ノミソ知盛ハ思事ト宜ヘハ……」(屋)本(七五頁)とだけあって、「取九郎冠者入海」は注意深く削除されている。彼にとって、敵將の首は関心の外にあり、没落、敗戦は、必然のすじ道なのであつて、彼の唯一の関心は、この壇浦の海戦で、いかに見事に死ぬかという倫理上の問題に注がれてくるのである。都決戦論を主張しながら、それを容認されなかった今となつては、もはやすべてが運命なのであつて、彼はその必滅の運命を、たじろかず引き受けること、そこに(屋)本知盛像の生の根拠、あるいは原理といったものが見い出されるのである。都落ちの時点で、平宗盛が、平頼盛の裏切りに怒つて矢を射かけんとする侍たちに対し、次のように述べて制止するところがある。「其事サナク共有ナム、忘<sup>テ</sup>年来重恩<sup>ニ</sup>此有様見終<sup>ル</sup>」程奴原ヲ中々蒐角フ云ニ不及<sup>一</sup>(屋)本(七五頁)ここで云われている「此ノ有様ヲ見終<sup>ル</sup>」る、という行為こそ、平家一門の人々が、それぞれの身に背負わねばならなかった重い掟であり、義務であつた。平知盛は、一門の滅亡が歴然となつた壇浦の海

上で、はじめてさわやかな笑いを浮かべ、「今ハ見ヘキ程ノ事ハ皆見終ツ、此後有トテモ何事ヲカ見ヘキ」(屋)本(七五頁)といい放つが、彼にとってこの日こそ、その重い掟や義務感から、はじめて解放される晴れの日であつたのである。つまりこの「見ヘキ程ノ事ハ皆見終ツ」という言葉は、都落ちの折の宗盛の「此ノ有様ヲ見終<sup>ル</sup>」る、という言葉と対応し、運命観と呼応することによって、彼が一門の没落の運命を最後まで見届けた人であつたことを意味しているのである。彼は、一門の没落を「見終<sup>ル</sup>」る、という行為を通して、そこに厳然たる運命の支配を見たのだといつてもよい。とにかくこのような知盛像を造型しえた(屋)本の作者にとっては、もはや、例の阿波民部重能の裏切りといえど、充分に理解し、許し、その歴史の状況のなかに位置づける高い立場を獲得しえていたことはたしかなのであつて、(屋)本には、重能の裏切りについて、④本にはまったくみられない次の記事があるのである。「阿波民部成能ハ此三ヶ年ノ間、平家ニ能ク忠ヲ尽シタリケレ共、嫡子田内左衛門ヲ源氏ノ方ヘ生虜ニセラレテ恩愛ハ道ノ悲シサハ今一度見ント思ケレハ忽心替シテ赤旗切捨テ源氏ノ方ヘソ付ニケル」(屋)本(七九二頁)このことは、問題を知盛像にかえて考えてみれば、(屋)本の知盛にあっては、おそらく作者と同様、この重能(成能)をはじめとする西国の領主層の裏切りを、運命が尽きれば必然的に起る事件として、すでに、都落ちの時点で見通され、本質的には肯定されていたのであつた。とにかく、このようにして彼は、平家の没落という「修羅」の背後に、鉄のごとき運命の支配を自覚することにより、「修羅」そのものを乗り越えることができたのだ、と考えることができる。しかし、一方、運命観を有せぬ④本の知盛にあっては、重能の裏切り



は、表面的にも、本質的にも、とうてい許しえない行為であり、このような彼にとって、一門の没落を見届けることとは、即ち「修羅」を見ること、「修羅」にまみえることではなかった。(四本の知盛もまた屋島で、「一谷戦」此御有様見了参 武蔵守一所死ザリシ事こそ口惜」と述べてはいる。ここに使われている「見了」という言葉は、都落ちにおける宗盛の「忘年来重恩何 不見落」留所 留程者ヲ不及菟角云の「見」という言葉と対応し、壇浦における知盛の「可<sub>レ</sub>見事見ッ今為何……」(四本下巻の一八三頁)の「見」る、という言葉と呼応することによって、(四本知盛もまた、一門の没落を「見」よう、「見了」よう」と意志した人であったことを物語ってはいる。しかし、彼の「見了」という行為には、都落ちの時から、あまりにも「口惜」さがつきまといすぎている。都で決戦打死すべきであった、一の谷で子息知章と一所で死すべきであった、というおのれの意志に反して歩んだ人生に対する彼の悔恨や怨恨は、運命の洞察を欠いた(四本の知盛にあつては、しごく当然のことであつた。このようにみえてくると、「修羅」を「修羅」としてしかみることのできなかった(四本の知盛像と、「修羅」のかなたに運命の支配をみることのできた(屋本の知盛像との差は、あまりにも歴然としている。(屋本の知盛は、「修羅」のかなたに運命の支配を見ることにより、おのれの一門の没落の八時間Vを肯定しえた。あるいは、彼は、おのれの一門の没落の必然性を肯定したといつてもよい。とにかくこのようにして、(屋本の作者は、没落の八時間Vの肯定という、その八時間Vの造型を通して、中世革命の八歴史Vそのものを肯定するにいたつたのであつた。(屋本知盛像の晴澄さは、この八歴史Vの肯定感から来ている。逆にいえば作者は、八歴史

史Vの肯定という思想を所有することにより、その晴澄さを獲得したといつてもよい。八歴史Vの肯定というすがすがしい光に洗われた(屋本の世界に、浄土教的な光につつまれた灌頂巻一篇は異質であらう。(屋本知盛は、一門の没落の八時間Vを肯定することによって、(四本の知盛が、おのれの人生に対して抱いていた悔恨や怨恨から解放され、おのれの人生を救拔しえた。すでにおのれ自身を、おのれの内部からよく救拔しているものにとって、よしそれが回向であれ、鎮魂であれ、いかなる意味においても、外部からの救済は蛇足であらう。平家物語(屋本に、灌頂巻の存せぬゆえんである。以上、私は、都決戦論を否定された知盛が、一門の没落を見届けようとして、そこに運命の支配を見た(屋本と、「修羅」をしかみることのできなかった(四本との構造のちがいのなかに、この物語の思想——特に灌頂巻有無の意味について——を読みとろうと試みた。ここで問題になった運命観の造型については、「修羅」に対する凝視、ないしは自覚的な追求、徹底が生みだしたのであつただろうということについては、すでに前稿で述べた通りである。おそれなく平家の作者は、平家一門の没落に重ね合わせて、貴族としてのおのれの階級の没落の悲哀を、その「修羅」の絶望のなかに見ていたにちがいない。しかし、この作者は、やがて、その絶望への凝視のなかに、しだいに没落の必然性という八歴史Vの肯定の思想を生みだしていったのである。(屋本知盛像の運命観の創出と、その構造こそ、この物語の思想のピークをなしていると私は思う。最後に、寛一本灌頂巻についても一言しておかねばならないが、この本の知盛像が、(屋本とはほぼ同じ形象を勝ち得ていながら、灌頂巻を独立させているゆえんについては、この論の冒頭に少しふれたごとく、



物語の内容の必然性から、そこにあるというのではなく、あくまで平曲伝授上の伝法灌頂としての意図に基づいて、そこに置かれてあると思うのである。したがって覚一本知盛もまた、灌頂巻を必要としない思想を有していることになるのである。

注 1 私の修士論文で次の三章からなる。(一)平清盛論—遅すぎた帰村—(二)平貞能像—その東国落ちについて—(三)平知盛像—修羅のゆくえと灌頂巻—。この拙論は、(三)を改題したもの。

注 2 大系本平家物語下巻解説P23「この書に『灌頂巻』一巻がある事は最も注目されることである。……表題に『裏書』とあるのは、物語全体を『表書』と見ての意味であろう。……これは灌頂巻の草分けかも知れず、しかもその六道は『裏書』の趣向をとり、その前後が構式、経文に取り囲まれていることは、正に結縁灌頂を意味するものとして注目されねばならない。」山下宏明編著「源平闘諍録と研究」にも同様の見解がみられる。

注 3 「新中納言知盛卿の給ひけるは、『東国北国の物どもも随分重恩をかうむったりしかども、恩をわすれ契を変じて、頼朝・義仲等にしたがひき。まして西国とても、さこそはあらんずらめと思ひしかば、都にていかにもならむとおもひし物を、わが身ひとつの事ならねば、心よはうあくがれ出て、けふはかゝるうき目を見る口惜さよ』とぞの給ける。誠にことはりとおぼえて哀なり。」(大系本巻十一)(三〇三頁)

注 4 「(女院)人ハ生ヲ替テコソ六道ヲハ見候ナルニ乍、生六道ヲ見テ候ト申サセ給ケル……サテモ過ニシ壽水秋初木曾トカヤ云者被ニ攻出ニテ遙々ノ浪ノ上ニ漂ヒテ……一ノ谷トカヤノ

軍ニ負テ一門十人可然侍三百余人被シカハ……修羅ノ闘諍モ角ヤトコソ覚ヘシカ、山野雖レ広ト息ヌストスルニ無所、……過ニシ歳ノ春ノ暮レ先帝ヲ始進セテ一門ノ人共門司赤間ノ浪ノ底ニ沈シカハ残り留ル人共ノ喚叫フ声、叫喚、大叫喚ノ地獄ノ底ニ落タランモ是レニハ過シトコソ聞ヘシカ……」(大系本巻十二)(九四八頁)

注 5 「平家物語の基礎的研究」二六五頁・二八三頁・二九九頁の三箇所。

注 6 「平家要所少少——日連の聖教録から——」

(『説話文学研究』第一号)

「平家物語の生成と日連遺文」

(『国文学研究』第26集)

注 7 引用文中の( )内の返り点、送りがな、は筆者が補ったものである。以下の文においても同じ。

注 8 「二ツの知盛像」では、ここの解釈を「知盛が、なんの見通しもなく都落ちを決定した『拙気』な宗盛に対して、『此御有様』を、一の谷で、子息知章と一緒に自分も死ぬことによつて、早く『見了参せ』るべきであったと、口惜がっている所である。」と書いたが、本文の解釈の方が正しいと思う。訂正しておきたい。

注 9 「二ツの知盛像」(『日本文学』一九六八・六月号)

注 10 石母田正「平家物語」(岩波新書P16)